

ラテン語と

秋山 学

名言・金言による比較言語学

フランス語 6

早いもので、このコラムも最終回を迎えました。歴史を顧みる意味で、今月はローマ最大の史家、タキトゥス (A.D. 55–120) を取り上げようと思います。

タキトゥスの著作として伝えられるものとして、まず短編には、古代ゲルマン人に関する資料として著名な『ゲルマニア』、史家の岳父に関する伝記で、やはり古代ブリテン島に関する資料ともなっている『アグリコラ』、それにやや文体は異なりますが真作と認められる『弁論家をめぐる対話』があります。そして大部の著作としては、今回扱う『年代記』のほか、A.D. 68年にローマ皇帝ネロが没した後、わずか6カ月の間皇帝位にあったガルバ (B.C. 3–A.D. 69) に始まり、ドミティアヌス帝の治世 (A.D. 81–96) までを取録していたと考えられる『同時代史』(全12巻)があります。この作品は冒頭から第5巻の半ばまで (A.D. 69–70) しか残存していません。

タキトゥスの主著とされるのは、全18巻から成る『年代記』(Annales)です。正確には「神君アウグストゥスの崩御後の歴史」(Ab excessu divi Augusti)と題されていて、アウグストゥスの没後 (A.D. 14)、第二代ティベリウスから第五代のネロまで、4皇帝の治世に関する記述です。もっとも、現存するのは第1巻から6巻までと第11巻の半ばから第16巻までで、第三代カリグラ帝についての原文すべてと、第四代クラウディウス帝に関する最初の部分が失われています。しかし残存部分のなかには、ローマの大火 (A.D. 64) に関する記述 (第15巻) など、史料的に重要なものが含まれています。

タキトゥスはローマ史学史のなかでは、『ローマ建国史』を著したティトゥス・リウィウス (B.C. 59–A.D. 17) よりも、むしろ『ユグルタ戦記』や『カテリーナの陰謀』の著者として知られるサルスティウス (B.C. 86–35) の後継者として位置づけられます。そしてこのことは、ギリシア史学史からの流れの上で、リウィウスがしばしばヘロドトスに比せられるのに対し、サルスティウスがトゥキュディデスになぞらえられることから、タキトゥスが物語的な歴史記述よりも、客観的な史実を追究する実証史家の一人とされることを意味しています。もっともタキトゥスの文章は、帝政期ローマの暗鬱たる空気を反映していて、彼の筆致には独特のベシミズムがみなぎっています。

『年代記』は、冒頭 ‘Urbem Romam a principio reges habuere’ (都市ローマは当初王が支配していた) という一文から起こされます。この文が叙事詩韻律、すなわち「長短短六韻脚」で記されていることは、単なる偶然とは思われず、したがってタキトゥス

は、11月号で取り上げたエンニウス以来の年代記の系譜に連なることを意図したのであるということ、しばしば指摘されます。この句を含め、冒頭の第1章は簡潔なローマ史の概観になっていて、今月取り上げるのは1章1節の中途から最後までです。

[原文] non Cinnae, non Sullae longa dominatio; et Pompei Crassique potentia cito in Caesarem, Lepidi atque Antonii arma in Augustum cessere, qui cuncta discordiis civilibus fessa nomine principis sub imperium accepit. (*Annales*, I.1)

[仏訳] Ni la domination de Cinna ni celle de Sylla ne furent durables; de même, la puissance de Pompée et de Crassus passa bientôt à César, les armes de Lépide et d'Antoine à Auguste, qui recueillit le monde, fatigué des discordes civiles, sous son pouvoir suprême, en prenant le nom de prince.

[拙訳] キンナの世も、スッラの天下も長くはなかった。ポンペイウスやクラッスの力も早々にカエサルの下に降り、レピドゥスとアントニウスの軍勢もアウグストゥスに屈した。このアウグストゥスが、内乱による無秩序によって疲弊した全世界を、「元首」という名のもとに自らの支配下に置いたのである。

単純な史実を羅列した文章だと思われるかも知れませんが、タキトゥスの筆は躍動感に満ち、表現に繰り返しは見られません。以下拙訳文に沿って述べると、まず第一文の原文には、彼の文章に頻出する「名詞止め」が用いられており、be動詞に該当する繫辞がありません。第二文も、前半と後半では微妙に諸要素を組み換えることで(e.g. -que と atque)、語順が反復されることを避けています。そして第三文は、原文では関係代名詞 qui で第二文に接続していますが、力点は関係節の方に置かれています。

仏訳を見ておきましょう。まず第一文には、やはり être の変化形 furent が含まれざるを得ません。第二文、原文の主動詞 cessere (cedo「屈する」)の完了第三人称複数形が後半部の総括的位置にあるのに対して、仏訳の 'passa bientôt' は前半部に配されています。また le monde には、分詞句 'fatigué des discordes civiles' が後ろから説明的に付されていますが、ラテン語原文でここは、奪格に置かれた二語 discordiis civilibus が、中間のはさまれる位置にあり、そこに説明的色彩は見えません。'en prenant le nom de prince' というジェロンディフ句も、原文では奪格に置かれた二語のみです (nomine principis)。このように、タキトゥスは冗漫さを徹底して廃することにより、重厚さに満ちた新しいラテン語文体の可能性を切り開いたと言えます。これは紀元後1~2世紀、ラテン語の文章語が口語から乖離し始めた頃であり、口語ラテン語はこれ以降、次第にロマンス諸語への傾斜を見せることになります。

半年ほどの期間でしたが、読者諸兄姉に厚く御礼申し上げます。(あきやま・まなぶ)